



大阪商業大学 FD ニュースレター

第 24 号

2023 年 3 月発行

C O N T E N T S

1	公開授業と意見交換会	1
1-1	公開授業	1
1-2	意見交換会	1
1-3	公開授業を終えて	2
	「ゼミナール I A」	2
	尾場 友和（公共学部公共学科 准教授）	
	原田 禎夫（公共学部公共学科 准教授）	
	「ビジネス・プログラミング I」矢野 芳人（総合経営学部経営学科 助教）	5
	「地域経済学 I」木下 祐輔（経済学部経済学科 専任講師）	8
	「デジタルメディア I」宇治 典貞（総合経営学部経営学科 専任講師）	11
	「情報処理概論」梶浦 大起（総合経営学部経営学科 助教）	13
	「心理学 I」佐々木 尚之（公共学部公共学科 准教授）	17
	「社会・地歴科教育法」西岡 尚也（公共学部公共学科 教授）	20
	「健康心理学」上床 幸太（経済学部経済学科 助教）	22
	「商法（会社総論）」脇黒丸 新太郎（総合経営学部商学科 助教）	25
2	授業アンケート	27
2-1	実施方法	27
2-2	対象科目	28
2-3	教員からのフィードバック	28
2-4	結果の開示方法	28
3	FD 研修会	28
4	大学院 FD 活動	29
	「『2022年度修士論文中間報告会』開催される」	
	南方建明（大学院地域政策学研究科長・教授）	
	《編集後記》	30

1 公開授業と意見交換会

1-1 公開授業

今年度の公開授業は、前期第9回授業にあたる2022年6月13日（月）と第11回授業にあたる6月27日（月）～7月1日（金）に、オンライン授業2つを含む9つの授業科目を対象に行われた。今年度の公開授業の授業科目と開講日時、教室は下表のとおりである。授業科目の選出にあたっては、「今年度着任した新任教員の担当科目」のほか、授業内容や受講者数などが勘案された。

月日	時限	科目名	担当教員	教室
6月13日（月）	1	ゼミナールⅠA	尾場 友和 （公共学部公共学科 准教授） 原田 禎夫 （公共学部公共学科 准教授）	642
6月27日（月）	4	ビジネス・プログラミングⅠ	矢野 芳人 （総合経営学部経営学科 助教）	情報3
	5	地域経済学Ⅰ	木下 祐輔 （経済学部経済学科 専任講師）	961
6月28日（火）	2	デジタルメディアⅠ （オンライン授業）*	宇治 典貞 （総合経営学部経営学科 専任講師）	621
	5	情報処理概論	梶浦 大起 （総合経営学部経営学科 助教）	421
6月29日（水）	3	心理学Ⅰ （オンライン授業）*	佐々木 尚之 （公共学部公共学科 准教授）	623
6月30日（木）	4	社会・地歴科教育法	西岡 尚也 （公共学部公共学科 教授）	教職課程 指導室
7月1日（金）	3	健康心理学	上床 幸太 （経済学部経済学科 助教）	531
	4	商法（会社総論）	脇黒丸 新太郎 （総合経営学部商学科 助教）	426

*オンライン授業については、manabaの「公開授業」コースにアップロードされた資料を閲覧し、開講日時に教室において「オンライン授業の運営方法」について担当教員から説明を聞く、という参観形態をとった。

公開授業実施の目的は、参観教員が授業運営方法や工夫に関する新たな知見を得ることに加えて、質問やアドバイス、それに対する返答などを公開授業担当教員と交換し、その結果を互いの授業運営に活かしていくことにある。このため、各授業では参観教員を対象に、興味深い点や参考になる点などを自由記述形式で回答するアンケートが実施された。さらに、公開授業担当教員と参観教員が参加する意見交換会が後日開催された。

1-2 意見交換会

意見交換会は、2022年7月13日（水）16:30～17:30、本館6階大会議室において、公開授業担当教員と参観教員ら計18名が参加して行われた。

会次第は次のとおりであり、公開授業検討ワーキングの森田学准教授による司会進行で円滑に進められた。

＜会次第＞

1. 開会挨拶（FD 委員会委員長 西嶋淳教授）
2. 公開授業担当教員による公開授業に関する報告と参観教員による感想や意見の交換
3. 総括と閉会挨拶（FD 委員会委員長 西嶋淳教授）

＜意見交換会の様子＞



1-3 公開授業を終えて

公開授業を今回担当した 10 名の教員には、意見交換会で報告した授業における工夫や苦心、公開授業を終えた感想、アンケートや意見交換会で出たコメントに対する回答などを文章の形でまとめていただいた。以下にその文章を掲載している（公開授業実施順）。



「ゼミナールⅠA」

尾場 友和 原田 禎夫

（公共学部公共学科 准教授）（公共学部公共学科 准教授）

1 はじめに

今年度初めての試みとして「ゼミナールⅠA」の公開授業が行われました。ご参加いただいた先生方、職員の皆様から、大変有意義なコメントをいただいたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

「ゼミナールⅠA」は、1 年次生にとっては、このクラスをもとに新入生オリエンテーションも行われるなど、単なる授業・講義という以上の意味のある科目だといえるでしょう。私、原田が本学に赴任した 2005 年当時は、現在とは異なり、各クラスの担当教員は 1 人で、授業の内容も特に定められたものはなかったように記憶しています。たとえば、私の場合は、中小企業の町・東大阪を知ってもらおうと大学周辺の町工場を訪問したり、大学周辺の散乱ごみの調査を行ったりしていました。

ただ、入試制度が多岐にわたり、大学進学に対する意識も多様化する中で、さまざまな課題も生じ、個々の教員だけでは年々対応が難しくなっていたように感じます。さらに、「友人がいない/できない」といった理由での早期退学者の増加といった問題や、文章を「読む力」「書く力」の不足と

いった問題も、全国の大学同様に本学でも生じるようになりました。

そうした課題の解決を目指して、複数教員での担当や S-Log と連動した授業など、「ゼミナール I A」でもさまざまな取り組みが行われてきました。特に今年度は、文章を「読む力」「書く力」の向上に力を入れたカリキュラムが組まれました。

2 授業全体の運営上における工夫

今年度の「ゼミナール I A」では、「読んでまとめる力を身につけよう①～⑦」を尾場先生が、それ以外の回を私、原田が主として担当することとしました。主担当の教員は教卓で説明を行い、もう 1 人の教員は教室を巡回し、学生に個別の指導を行いました。1 時限目からの 50 人近い授業では眠そうにしている学生も多く、きめ細やかな対応をすることで集中力を持続させることを狙った役割分担です。

この方法をとることで思いがけない効果もありました。学生は、挙手してまで質問するようなことではないと思いつつも、さまざまな「わからないこと」を抱えているものです。全員の前で質問することは恥ずかしい、と考えがちな学生の疑問に答えることができただけでなく、そうしたことをきっかけに、時として雑談のような対話も生まれました。

出席システムの導入以来、出席簿の読み上げがなくなり、さらにはコロナ禍で全員がマスクを着用している中で、学生一人ひとりの名前を覚えることは、私たち教員にとっても至難の業となりつつあります。そうした中で、些細なことでも質問すればいいんだ、という学生への意識づけにつながったのであれば嬉しく思います。

3 「読んでまとめる力を身につける」ワークショップの工夫

この期間の授業において私が心がけていたことは、通常の授業で配布される参考資料を読んで理解できる力を学生に身につけさせる、ということです。これは、「ゼミナール I A」のシラバス改訂にあたり、昨年度の初年次教育検討委員会で話題となったテーマですが、オンライン授業実施で学生のレポートを目にする機会が増えた、多くの先生方が感じる課題と一致するものでもあったと思います。シンプルでありながら大学の学修を支えるこの力を伸ばすには、どのように取り組めばよいか。私は、シラバスに沿いながら文章の読み方を抵抗感なく学生に伝えることが大切だと考え、次の点に注意を払いました。

① 答えを 1 つにしない

高校までの教科の学習では、正答が必ず 1 つ用意されています。それは厳格さと公平性が求められる大学入試や高校入試の影響からでしょう。しかし、厳格さのハードルが高い場合、ときに人はやる気をなくしてしまいます。このリスクを回避するため、授業では完璧を求めず、概ね 8 割の正答を目安に授業をしました。少々消化不良な感じがするかも



しませんが、なんとなくでも「わかった感」が得られれば、次の学習にもつながる成果だと考えました。

② 学生の自覚を促す

学生の学習の質を高めるにはどうすればよいか。私は、学生に備わっている競争心を利用しようと考えました。大学で初めて学ぶ基礎科目の場合、学生は初学者ばかりで差が起きにくいのですが、今回のような文章の読解力を問う課題の場合、できる学生とできない学生では大きな差があります（実のところ、ちょっとした知識と工夫の差なのですが…）。この差を利用し、グループワークを通じて読解が苦手な学生に奮発してもらおうと考えました。授業終わりの「振り返りシート」では、周りの学生からの刺激に関する記述が多数見られ、このねらいは一定程度上手くいったと感じております。



③ 「ゼミナールⅠA」は修行の場

「ゼミナールⅠA」は他の一般的な講義科目とは異なり、学びの過程が評価軸にあるように思います。これは、学生にとって失敗を恐れずチャレンジ精神を養う絶好の場だと思います。この授業で何度も失敗しながら成長し、最終的に専門科目や卒業後のビジネスの世界で上手いになればそれで良い、と私は考えています。「ゼミナールⅠA」は、そんな緩い感じでありながらも、大事なことをしっかり伝える、そういう時間にしていければよいのではないかと考えて取り組んでおります。

4 ワークショップの工夫

以上のように取り組んでまいりましたが、参観いただいた先生方もお気づきのように、どのようにすれば学生のモチベーションを持続的なものにできるか、という点が大きな課題だと感じております。パターン化した授業は学生に安心感を与えますが、見方を変えれば、マンネリになり飽きられてしまいます。それゆえ、FD 活動を通じて披露していただいた先生方の授業の工夫は大変貴重です。ご参加いただいた先生から次のようなご意見をいただきました。

教材は、課題文、ワークシート部分が整然と集約されている反面、受講者が作業を行う際には頻繁にページをめくる必要があります。両先生は、受講者の便に配慮され、書き込み等ができる作業用という位置づけで課題文の写しを配布されました。

一長一短があると思いますが、作業段階では解答例等を見せないという意図もあって教材を返却せず、課題文・ワークシート部分を A3 横 1 ページに並べた補足資料を配布して作業を行わせ、その後に教材を返却して転記させるという進め方もあります。

唯一の正解はないと考えますが、今後に向けての課題かと思われます。

まさにご指摘の通り、いざ学生目線で授業運営を検討した際、学習のしやすさの点で上手く指導する術が見当たりませんでした。そこで今回は課題文のコピーを配布するに至ったのですが、ご提

案のような手もあることには、考えが及びませんでした。最後に「唯一の正解はないと考えます」と述べられていますように、確かに学生の状況次第でベストなやり方は異なると思います。しかしこのようなご提案をいただいたことは、私にとって目から鱗でした。これからも先生方との授業に係るコミュニケーションを大切に、授業改善につなげたいと考えております。

(1・2 担当：原田、3・4 担当：尾場)

「ビジネス・プログラミングⅠ」

矢野 芳人

(総合経営学部経営学科 助教)

1 はじめに

令和4年度より本学に着任し、「ビジネス・プログラミングⅠ」をはじめ、情報系の科目を担当させていただいております。今回の公開授業では、ご参加いただいた先生方から様々なコメントをいただきありがたく思っております。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

この授業は2年前に非常勤講師として着任した時から担当させていただいている科目で、今年度で3年目となります。今年度の履修者数は42名です。

授業の概要は、Microsoft Office シリーズの1つである Excel を使用し、VBA という言語を使用して分岐処理や反復処理をさせるプログラムを作成し、オフィスソフトをより便利かつ高度に使いこなすための基礎知識と基本技能を習得することです。また、プログラミングを通じて、実務上必要となるデータ処理方法の理解、および論理的思考力の涵養も目指しています。

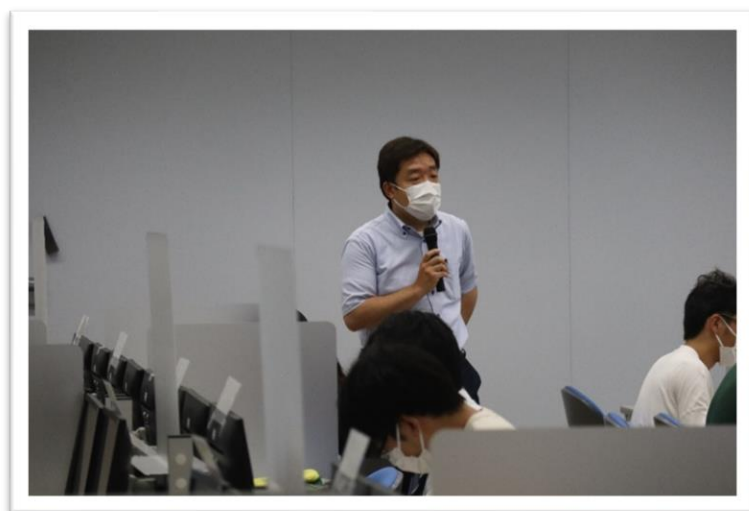
2 授業運営上の工夫

2.1 授業の構成

授業の開始時に授業資料を毎回配布し、その内容に沿って進めていきます。

初めは前回の復習をし、授業内容を思い出してもらうための時間を設けています。ほとんどの回で最後に課題を出しているため、フィードバックとして答え合わせをして前回授業の理解を深めてもらいます。

その後は、授業資料に沿って説明フェイズと実習フェイズを何回か繰り返し、理解の定着を図ります。授業の終盤で出す課題は次週までの宿題とし、manaba で提出してもらっています。



2.2 授業で意識していること

学生に理解をしてもらうには、こちらが説明をしている時に聞く姿勢になってもらう必要があると思います。特にコンピュータを使用した実習科目については、それを意識した取り組みを2つ実践しています。

1 つは、友達同士で自由に着席すると私語がどうしても増えるため、座席を指定しています。もう 1 つは、授業中の各フェイズで以下の点を守るよう学生に注意しています。

● 説明フェイズ

- ① キーボードやマウスを触らず、教員の話をもて聞き、理解に努める。
- ② 重要と思う箇所や、授業資料や教科書に書いてないことが話に出た場合は、必ずメモをする。

● 実習フェイズ

- ① 授業資料に書いたメモを見ながら、プログラムを作成し実行する。
- ② わからなければ周りの学生に助けてもらう。それでもわからなければ巡回してる先生かアシスタントに聞く。

説明フェイズについては、説明時にコンピュータの操作をすると学生は話半分で聞くことになってしまうので、それを禁止してメモを取ってもらうようにしています。

コンピュータ専門学校や他大学で教育に携わってきた 20 年来の経験則で述べさせていただきますと、教員が実習内容を操作しながら説明している時に学生も同時に操作すると、その瞬間は学生もできた気分になります。しかし、コンピュータ操作が苦手な学生ほど次の授業で前回の内容を忘れてしまうことが多く、何も残っていない傾向が見られるように思います。



復習時あるいは次の授業で前回の説明を思い出してもらうためには、つまり「学生に何を残すのか」を考えると、ありきたりではありますが、授業資料や教科書などにメモを取ってもらうことが良いのではないかと思います。最近ではコンピュータのメモ帳機能、またはスマホやタブレットでメモを取る学生も見受けられるので、学生自身が勉強しやすい方法であるなら紙ベースである必要はないのかもしれません。

実習フェイズでは、説明フェイズで聞いた内容を実践してもらいます。説明と同時に操作するのではなく、少しでも時間をずらして操作することで反復学習になると考えています。しかし理解できなかった学生がいる場合は、周りで理解できていそうな学生に助けを求めるように指示しています。その理由は、大学教育の場は専門的な教育だけではなく、コミュニケーション能力の涵養や人脈形成の場でもあると考えているからです。座席指定をして友達同士で着席させない理由もそこにもあります。

理解できている学生が理解できなかった学生に教える場合にも、「なぜその答えになるかの考え方について説明したりヒントを出したりするようにし、答えを直接教えないように」と指示しており、できるだけ学生同士で問題を解決できるような仕組みや雰囲気作りをしています。そしてどうしても解決できなかった場合の最終ラインとして、教員やアシスタントが直接教えるという形をとっています。

2.3 難しいと感じる点

この授業では、「1 はじめに」で述べた通り、Excel で VBA を使用するため、受講するにはコンピュータ操作はもちろんのこと、Excel については「情報リテラシーA」または「情報リテラシーB」の授業内容程度の基礎的な知識と技能が備わっている方が望ましいです。

初回授業でそういったアナウンスはするのですが、例年、数人は基礎的な知識と技能が備わっていない学生が受講します。したがって、彼らのフォローと本来の授業進行とのバランスを取る必要がありますが、学生の能力差は毎年違うので、その舵取りはいつも難しいと感じています。

3 公開授業を参観していただいた先生方のコメントと回答

1) 授業の進め方に関するコメント

- ・担当者の説明は平易かつ親切である。配布テキストには工夫が施されている。

【回答】「説明が親切」というお言葉は本当にありがたく思います。先述の「2.2 授業で意識していること」に書くべきことかもしれませんが、学生に対して「なぜわからないの？」とは絶対に言わないよう心掛けています。学生が理解できない場合は私の説明が不十分だと考え、私が説明できなかった場合は周りの学生を巻き込んで学生同士で説明してもらい、その言葉を私の語彙に組み込むようにしています。教え方も日々勉強と思い、学生からも学ぶという姿勢を心掛けることで、「説明が親切」という評価をいただけたのではないかと思います。

配布している授業資料については、この授業の主担当である樽磨教授から引き継がせていただいたものです。基本的には年度開始にあたって授業内容を樽磨教授と相談させていただいていますが、授業が進行していく中で、学生の理解度などに応じて説明の文言の変更、課題内容の変更など、多少の改変をしています。

2) アシスタントに対するコメント

- ・アシスタントがいて、配慮が行き届いている。
- ・担当者とアシスタントが実習中に適宜、教室内を巡回し、受講生の理解に役立っている。全体として、授業の雰囲気が良い。

【回答】コンピュータを使用した実習科目は、アシスタントの助けなしには成立しないと思います。アシスタントが授業内容および進行を理解し、授業中に適切な振る舞い（巡回および学生へのアドバイス）をしてくれることで、教員は授業全体の管理に意識を向けることができると思います。

3) 授業全体に対するコメント

- ・受講生は静寂を保ち、熱心に実習に取り組んでいる。また、受講生は個々のペースで実習に取り組み、集中している。学生同士が相談し、助け合い、好感を持てる。講義全体のムードに共鳴でき、参考になった。

【回答】「2.2 授業で意識していること」で述べたような取り組みが、授業全体をこのように評価していただけたように思います、本当にありがたい限りです。今後もこの取り組みを継続し、学生にとって学習しやすい環境作りを心掛けていきたいと思っています。

4 おわりに ―今後の課題―

「2.3 難しいと感じる点」で述べた、コンピュータ初心者の学生とそうでない学生のバランスを保つための舵取りについては、おそらく決まった解はないと思われます。したがって、毎年の課題として、その時その時で最善手を打つために考える必要があります。学生のために何をするべきかを常に考え、今後も気を緩めることなく邁進していきたいと思います。

最後になりましたが、公開授業に貴重な時間を割いていただいた諸先生方および職員の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



「地域経済学Ⅰ」

木下 祐輔

(経済学部経済学科 専任講師)

1 はじめに

2022年4月に本学に着任いたしました。公開授業を通じて、教壇からでは気づきにくい点について、受講生の目線から多くのご意見を頂戴し、改めて自身の授業運営を振り返る大変良い機会となりました。この場を借り、ご参加いただいた教職員の皆様、授業に参加し事前の課題にも熱心に取り組んでいただいた受講生の皆様に重ねて感謝申し上げます。

以下では授業の内容を簡単に述べるとともに、授業運営における工夫と、公開授業で頂戴したコメントを踏まえた今後の方針について述べさせていただきます。

2 授業の全体像と公開授業の実施概要

今回対象となった「地域経済学Ⅰ」では、全国的に少子高齢化が進む中で、地域の特徴や課題を発見し、その解決策を考える力を養うことを目的としています。そのため、地域の活性化や地域経済の自立を考える上で押さえておくべき経済理論の基礎と、経済規模や人口など地域経済に関するデータの読み方を身につけてもらうことの2点を到達目標として掲げています。

本科目は公共学部の2年生以上が選択可能となっており、今年度の履修者は46名、うち2年生が5名、3年生が17名、4年生が24名となっています。公共学部の学生が対象ということもあり、経済理論を解説する際には、できるだけ数式に頼らず、考え方や具体例を通じてイメージしてもらえるように、図や写真を多く用いて授業を進めています。

公開授業の対象となった第11回目の授業(6月27日)では、「商業の再生戦略」というテーマを取り扱いました。近年、中心市街地における商店街が売り上げ不振に陥り、空き店舗が増加している現状と背景を解説するとともに、中心市街地を今後どのように活性化させていくかについて解説しました。

3 授業運営における工夫

3.1 オンラインでも受講できる環境づくり

依然としてコロナ禍ではありますが、2022年度前期の授業は第2回目以降、対面で実施することができました。しかし、新型株の感染拡大などもあり、学生からは通学が不安だという声も聞かれました。

そのため、学生の意見も聞きながら、授業の基本構成を次のようにしました。

- ① 授業の前週に次のレジュメを掲載し、予習を促す。
- ② 対面授業への出席を通じて、教員の話す内容を耳で聞き、資料の中で空欄となっている箇所を自分の手で書き取って埋める。
- ③ 翌日に空欄の穴埋めを行った授業資料を期間限定で掲載し、早い段階での復習を促すとともに、やむを得ず欠席した人でも内容をフォローできるようにする。

以上のような順番で授業を行い、予習→対面授業の受講→復習というサイクルを意識して取り組んでもらいました。こうした穴埋め済みの授業資料の公表については、対面授業に出席した学生からも、聞き逃しても安心だ、教員の話に集中できる、といった前向きなコメントがありました。

また、授業内容を身につけられたかどうかの確認のため、授業が3回程度進んだ段階で小テストを実施しました（計4回）。この小テストは平常点として成績評価の対象となることを事前に伝えており、モチベーションの向上を図りました。

以上の取り組みはすべて manaba コースを通じて実施しており、オンラインでも無理なく受講できるように授業運営をしました。

3.2 視覚教材の積極的な活用

「2 授業の全体像と公開授業の実施概要」

で述べたように、授業で話す内容について具体的なイメージを持ってもらうために、毎週の授業資料にはグラフや図、写真などを多めに入れるようにしています。例えば、「地域経済の成長と衰退のメカニズム」について扱った回では夕張市の財政破綻を取り上げましたが、言葉



で聞いても具体的に想像することは困難です。しかし、街の様子や公共施設の写真などを見ていただくことにより、自分がこれまで見聞きした身近な風景と結びつけて考えられる、そのような資料作りを心掛けています。

また、授業内容に関連する YouTube の動画やニュース番組なども視聴してもらいました。授業の開始5分程度を動画の視聴に充て、これから授業で話す内容に関心を持ってもらうための材料として活用しています。

3.3 課題へのフィードバック

今回、自ら調べて発見し解決策を考えるために、受講生には全国の商店街における活性化事例を紹介する論述課題に取り組んでいただきました。回答を見ると、当初想定していた以上に面白く、多種多様な取り組みが記載されていたため、受講生の回答をまとめることで何か活性化策の共通項が導き出せないかと考え、試行的にテキストデータ解析を行った結果を授業資料に盛り込み、紹介させていただきました。

初めての試みではありましたが、ご参加をいただいた先生方からは「学生が提出した課題を教材化させていて参考になった」という声も頂戴いたしました。その後学生に聞いてみても、通常の課題解説よりも面白かったと幸いにして好評だったようです。課題については学習状況を把握するための物差しの1つではありますが、やりっぱなし、出しっぱなしではなく、今後も学生とのコミュニケーションのためのツールとして活用してみたいと思います。

4 頂戴したご意見と課題への対応方針

公開授業にご参加いただいた先生方から頂戴したご意見と課題、それを受けた今後の対応については、以下の通りです。

授業の構成や資料については、「受講生にとって丁寧な講義計画となっている」「カラフルなパワーポイントに豊富な資料があり、見やすい画面であった」「授業の導入に動画を用いて、学生の興味を引く工夫がされている点は良い」などのコメントを頂戴いたしました。大変励みになるとともに、今後とも続けていきたいと思っています。

一方で、「1回の授業に内容を盛り込みすぎているか」「1つの地域に絞ってはどうか」というご指摘をいただきました。毎回の授業ではテキストの1章分（約20ページ）をベースに進んでおりますが、進行状況によっては最後を駆け足で進めるという回もございました。これだけは知っておいてほしいという重要事項の取捨選択など、改めて見直してまいります。

次に、授業運営については、いくつか課題をご指摘いただきました。まず、穴埋め式の授業資料について、「後日穴埋め後の資料が見られるにもかかわらず、穴埋め作業に没頭している学生が見受けられた」という点については、穴埋めの数が多すぎるのではないかとこの視点から見直しをしてみたいと考えております。特に公開授業の回は「まちづくり3法」をはじめ、法律の穴埋めが多く、学生の側も誤りなく写すことに精一杯だったかもしれません。今一度、授業の運営方法を学生に伝えるとともに、ご提案をいただいた穴埋めのための時間を設けてみたいと思います。

また、学生の生の意見を引き出す工夫についてです。教員の側も面白い話をして学生の関心を引こうと考えますが、やはり難しいです。ご指摘をいただいたように、今後はグラフの中で顕著に落ち込んでいる部分の理由は何か、話題に上った地域に行ったことがある人はいるか、といった簡単な話題から授業に引き込む（巻き込む）ような工夫も行ってみてみたいと思います。なお、ご意見で頂戴したように、この点は教室の広さに起因する面もあるかもしれません（本授業は大教室961で行っており、履修者は46人で出席者は20名程度）。学生を教室前方に座らせて顔が見える状態を作り、意見を引き出すような試みも行ってみてみたいと思います。

5 おわりに

民間企業から大学教員に転じ、一番悩んだのが授業運営です。全15回の授業をどのように組み立てるのか、どのようにすれば学生に理解してもらえるのか、試行錯誤の連続でした。こうした中、前期の第11回目という比較的早い時期に、自身の授



業運営について振り返る機会を設けていただいたことは大変ありがたかったです。また、意見交換会当日にも、他の先生方の授業への考え方・臨み方を知ることができたことで新たな発見がありました。

最後に、公開授業および意見交換会にてご意見・ご出席をいただきました先生方に改めて感謝申し上げます。学生にとってより有意義な学びの機会となるよう、今後とも精進してまいります。

「デジタルメディアⅠ」

宇治 典貞

(総合経営学部経営学科 専任講師)

1 はじめに

この4月より「デジタルメディアⅠ」を担当させていただいております。今回は本科目を公開授業として行いました。公開授業にご参加いただいた先生方からは貴重なご意見をいただき、この場を借りて御礼申し上げます。また、いただいたご意見をもとに、今後の授業改善に取り組んでいきたいと思っています。

本科目の今年度の履修者は約400名であったため、PowerPointの授業資料をPDF化してマナバコースで配信しました。公開授業では授業運営の工夫点を3つ紹介させていただきました。

2 3つの工夫点

授業運営の工夫点として紹介させていただいた3つのうちの1つ目は、授業資料をPDFで配信する際に、パソコン用とスマートフォン用、それぞれの画面サイズに合わせて作成した点です。内容は同じですが、縦横比を変えて、スマートフォン用は縦長のスライドにしています。1枚に収まらない場合や見にくい場合は、ページを分割して見やすいように配慮しています。

2つ目は、授業をハイブリッド形式に変更した点です。本科目はもともと火曜日2時限目に配置されていたので、その時間に教室を手配していただき、その時間をこの科目のオフィスアワーとしました。この科目を何度か履修している学生もいるようで、初回の授業で「オンライン授業では心配」との声があったためです。実際に参加してくれた学生は少なかったものの、来てくれた学生にはせっかくなので対面で授業を行いました。積極的に参加してくれる学生はやはり学習意欲も高く、意見交換も活発に行うことができました。

3つ目の工夫は、毎回の授業ごとにアンケート調査を行ったことです。授業前(学習開始時)に学生自身の勉学に対するやる気と体調を、授業後(学習終了時)には授業内容に対する満足度を問いました。授業に対する満足度が低い場合は講



義資料に分かりにくい部分があったと考えられるため、自身の反省につながると考えたからです。

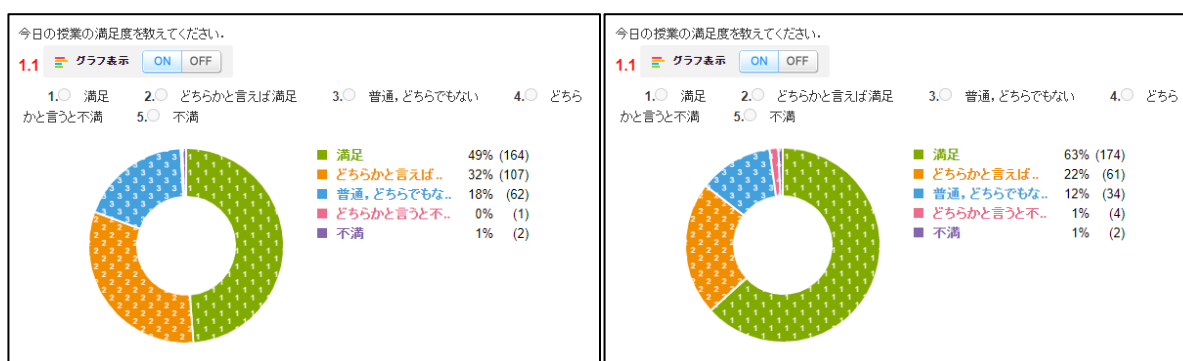


図 1 第 3 回授業時の満足度

図 2 第 14 回授業時の満足度

図 1 は第 3 回授業、図 2 は第 14 回授業の満足度調査の結果です。授業の回数を重ねるごとに満足度が上がっていったことにはある程度の安心感を持ちつつも、回答者数が減少傾向にあったことには不安を感じました。今年度はコメント欄を設けなかったために詳細な理由などを調べることはできませんでしたが、今後はコメント欄も設けて学生の意見を聞きたいと考えています。

3 意見交換会にて

公開授業を終えた後の意見交換会や公開授業アンケートでは、毎回の授業満足度調査やハイブリッド形式で授業を進めたことに対して好意的な評価をいただき、素直にうれしく思いました。

しかし、前述のとおり、授業の満足度が上昇したことはわかるものの（図 1・図 2 参照）、その要因までは調査を行っていませんでした。以前、他の授業でこの調査を行った際にはコメント欄を設けていました。そのコメント欄には、授業内容に対する質問や授業の感想から個人的な質問まで、いろいろな内容が書かれており、学生の意見を拾い上げることができましたし、そこから授業の反省や改善につながることもありました。意見交換会で満足度が上昇した要因もお伝えすることができれば、参考にしていただけたのではないかと反省しています。実際、「満足度が上がった原因は？」と質問をいただき、「授業内容が学生にニーズに合ってきたのでは？」とフォローしていただく場面もありました。後期の科目でも授業ごとに満足度調査を行う予定ですから、この点を修正したいと思っています。

また、今年度の商経学会では、これまで取り組んできた授業改善の方法について報告させていただきました。来年度の商経学会では今年度に得られたデータを分析した結果を報告できればと考えています。

他にも、講義資料の PDF がビジュアル化されている点やデザインの配慮などを評価していただきました。ただ、音声なども加えてマルチメディア化することをアドバイスとしていただきました。実際、希望者には対面で講義を行っていたので、その際に説明した内容を取り入れていれば、manaba で公開したり、教材を修正したりできたのではないかと思います。また、その際に学生から出た質問や意見を要約して公開していれば、学生にもっとフィードバックできたのではないかと、改善する余地があった点を反省しています。後期の「デジタルメディアⅡ」では、履修生が 200 人程度でおそらく対面授業となるため、これらを実践することはできませんが、来年度の「デジタルメディアⅠ」では準備をして望みたいと思います。



最後に、オンライン授業でのレポート課題について、コピーの対応をどうしているかと質問をいただきました。ご質問くださった先生も学生による課題のコピー問題を抱えており、その対応が難しいと言われていました。前期は、なるべく自分で考える必要のある問題や例を挙げるような問題を多くして対応してきました。それでもやはりコピーされた課題は提出されるので、後期の「デジタルメディアⅡ」では、問題をシャ

ッフルして出題する小テスト・ドリルを取り入れて対応してみようと考えています。

4 おわりに

今年度は約 400 名の履修者でスタートしたものの、課題の提出状況は最終的には 7 割程度でした。また教材コンテンツのアクセス数も、多いときは 1500 近くあった回もあれば、少ないときには 300 程度に下がっている回もあり、学生の興味にばらつきがあることを痛感しました。学生の取り組み状況を見ながら教材コンテンツの内容や見せ方に注意し、授業運営の工夫を重ねていきたいと思っています。

今回、このような機会を設けていただきありがとうございました。



「情報処理概論」

梶浦 大起

(総合経営学部経営学科 助教)

1 はじめに

今年度 4 月より本学に着任し、情報処理概論の授業を担当させていただいています。着任以前の教育歴はティーチング・アシスタント以外にございませんので、15 回の講義を全て担当するのは初めての経験です。本題に入る前に、公開授業に参加していただいた学生の皆さんと先生方にはこの場を借りて篤く御礼を申し上げます。

2 授業の概要

「情報処理概論」は、副専攻科目情報科目情報基礎領域にあたる科目です。本年度は、正木幸子先生、宇治典貞先生、矢野芳人先生が同じ科目をご担当されています。各教員は独自のシラバスを作成し、学生は自分の空いている時間と受講したい内容に合わせて履修する形となっています。私のシラバスでは、15 回の授業を大きく分けて以下の 3 つの領域で構成しています。

- ① 今年度から開始された新教育課程の高校情報科「情報Ⅰ」のトピック
- ② コンピュータの仕組み・構成に関する基礎知識、コンピュータの性能評価
- ③ 現代の情報処理で話題となる内容に関するトピックへの入門

①については、情報学の基礎的な知識を幅広く修得することを目標にした授業を行いました。具体的には、『『情報』とは何か?』といった点から始めて、歴史の中に現れる情報処理、情報と問題解決学、情報デザインなどについて講義を行いました。

②については、IT パスポート試験相当の内容について基礎的な部分から講義を行いました。IT パスポート試験は、独立行政法人 情報処理推進機構 (IPA) が「IT を利活用するすべての社会人・これから社会人となる学生が備えておくべき IT に関する基礎的な知識」を担保する基礎的な資格です。そのためこの内容を取り扱うこととしました。そのうえで、発展的内容として品質工学におけるコンピュータの利用についても扱いました。

③では、ネットワークや AI など、日常生活で聞く用語や社会人となってから使用する用語を取り上げながら、身近なものとして情報処理を理解するための基礎的な知識を扱いました。

公開授業にあたる第 11 回目の授業では、データベースに関する講義を行いました。なお、私が担当する本科目の受講生は 57 名で、1 年生が 22 名、2 年生が 9 名、3 年生が 12 名、4 年生以上が 14 名です。

3 授業の工夫

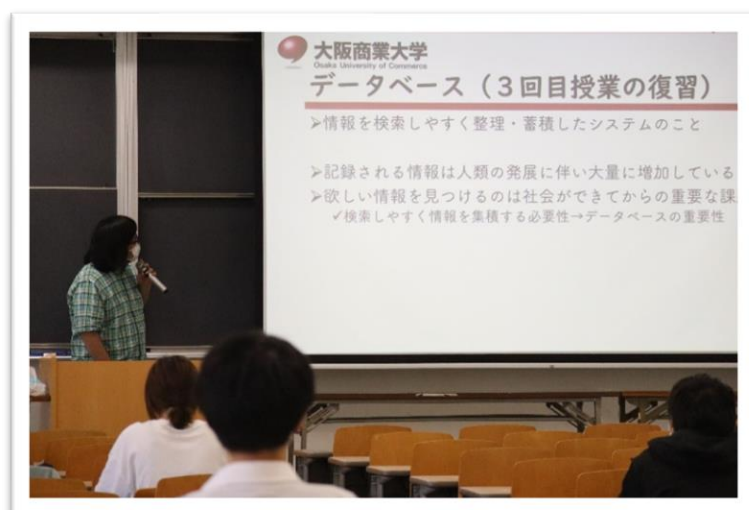
3.1 授業全体について

授業全体への工夫としては以下の点が挙げられます。

3.1.1 情報処理を身近に感じてもらう工夫

これまでの授業での学生とのやりとりやコメントを通して、多くの学生が「情報処理＝コンピュータの話＝自分には関係ない難しい話」という関連づけをしているように感じました。情報や情報処理は、コンピュータが開発される以前から人類の歴史の中で幾度となく現れ、現代においても人が意識的・無意識的に関わらず行っている身近な行為です。また、AI やネットワークなども、コンピュータによって大規模な処理が可能となっただけであり、それらを実現するアイデアやアプローチに秘められた「ところ」は非常に単純で素朴なものです。

この点を踏まえて本科目では、その「ところ」や学生自身が普段無意識に行っている行為について、



情報処理の観点から理解することを目標に講義を行いました。また、これ以外にも、通常では情報処理に関する入門の講義では扱わないような少し高度な概念や他分野の概念を持ち出して、情報処理の考え方に少しでも興味を持ってもらい、学生の記憶に留めてもらうための工夫もしました。この工夫は後述のレポート課題と合わせることで効果を持つと考えています。

3.1.2 レポート課題とその指導

本授業の成績評価方法はシラバス上では定期試験でしたが、受講生が57名ということもあり、より学修を深めてもらうためにレポート課題としました。レポート課題の内容は、「授業で扱ったトピックについて、興味を持った部分を自分で勉強し、レポートの問題文を自分で考え、それに解答せよ」というものです。異なる題材で2つのレポート課題を作成することを単位修得の条件とし、第6回目の授業でレポートの書き方の講義を行いました。



成績評価方法をレポート課題とした理由は、前述のとおり、情報処理をより身近に感じてもらうためです。前節でも述べましたが、この授業の目標は、実生活と関連する情報処理の具体例や考え方を学生の記憶に留めてもらうことです。それには、教員がレポート課題の題材を与えて学生が考える対象を限定しまうよりも、学生が自身の経験や知識や興味をもとに自由に題材を考え、実際に慣れ親しんでいる事柄を情報処理の観点から見つめ直す機会を持った方が効果的であろうと考えます。レポート課題の題材を考えるのが難しいという学生に対しては、メール、manaba の個別指導、オフィスアワー等を利用して個別に相談に乗り、学生の興味関心を聞き取りながら対話的に題材と一緒に考えるといったサポートを行いました。

レポート課題では、提出後の事後指導にも工夫を行いました。具体的には、manaba のレポート機能などを使い、採点結果の返却と同時に以下の点の指導を個別に行いました。

- ① 自分の意見と引用を厳密に分ける
- ② 内容についてより深めてほしい点について文献等を提示する

レポート課題の提出期間は5月から定期試験期間の終わりまでと、長期間にわたり設定しました。学生が提出するたびに新たに採点結果の返却と指導を行い、成績には最新の採点結果を反映することとしました。このように「100点がとれるまで何度も時間をかけて勉強して受験できる」方式をとった理由は、学生にじっくり時間をかけて繰り返し学習し、深く理解してもらうためです。

最後に実際の採点状況について述べます。指導は基本的に提出から1週間以内に行いました。具体的な指導内容として、①は「すべての主張・命題について引用文献を提示する」など、②は「このような文献を読むとより理解が深まる」などの内容をフィードバックしています。

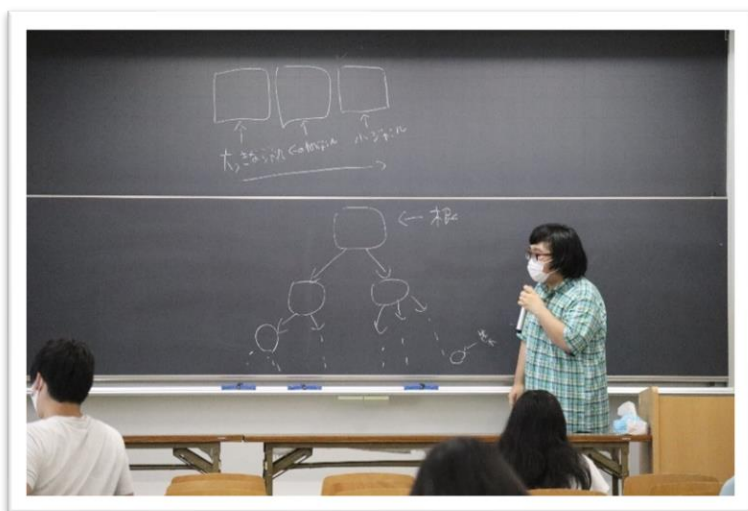
3.2 公開授業の工夫について

公開授業（第11回授業）で行った「情報処理を身近に感じてもらう工夫」について具体的に述べたいと思います。

通常、情報処理の授業でデータベースの話をする場合、コンピュータ上のデータベースの話のみを扱うことが多いです。しかし、この授業では、身近であり、受講生の専門分野と隣接するデ

データベースの例として図書館を取り上げることとしました。図書館の機能や図書分類法を通して、「多くのデータを検索しやすいように整理する」というデータベースの概念を紹介しました。

また、コンピュータが発展する前の段階で用いられていたデータベースとして、実際の「文献目録」の提示などを行いました。そのうえで、現代のコンピュータで用いられている「ツリー構造」というデータの構造化方式を紹介しました。そして、ツリー構造における効率の良い検索手法である「深さ優先探索」や「幅優先探索」の解説も行いました。



4 いただいたコメントへの回答

皆様から多くの丁寧で温かいコメントをいただき大変励みになりました。全てに回答したいところですが、今回は余白の関係上、改善点に関するご指摘を中心に回答させていただきたいと思います。皆様からのコメントについては、その概要のみ提示させていただいております。意図の誤解や曲解などがございましたら申し訳ございません。

<コメント1>

授業の余談で、検索エンジンのロボット型とディレクトリ型の説明をしていたが、授業後半でディレクトリの説明をしているので、その話は「脱線」ではなく当初から組み込まれていてもおかしくないのではないか。

【回答】当初から組み込んで然るべきというのは実際にその通りです。いろいろなことをしゃべりたいという気持ちが先行して抜け落ちていることも多いので、そこは意識して改善していきたいと思います。

<コメント2>

「深さ優先探索」と「幅優先探索」というものがあると知ることができて面白かった。具体例があるともっと良いと思う。

【回答】ご指摘はその通りだと思います。授業では一般論やアルゴリズムの紹介に終始してしまうことが多いです。それは、レポート課題で、授業で紹介した一般論の具体例について自分で考えてほしい、という意図があるからです。この点については別の回で学生にアナウンスしていますが、今回の授業でも繰り返しアナウンスすべきでした。

<コメント3>

レポートにコメントをつけて返信しているのは素晴らしいことだと思う。既にあるレポートの内容について、ある程度紹介しても良かったかもしれない。

【回答】このコメントをいただいた直後の授業で実践させていただきました。

<コメント4>

板書をする際に、「なぜ板書をするのか」と言ってから書き写させる方が良かったと思った。

【回答】確かにその通りだと思います。このコメントをいただき、自分でも「なぜ板書をするのか」という点についてあまり深く考えていなかった（説明したことを書き留めるメモくらいの意識しかなかった）ということに思い至りました。

<コメント5>

せっかく授業中に取り組んでもらったので、学生に答えさせるのも良いと感じた。また、全体的に先生の教壇上の「一方的なお話」が中心だったが、もっと机間指導などを加えた「双方向」の授業を意識して改善すると良いと思う。

【回答】双方向の講義の方法を多く取り入れ、学生が受け身にならずに自主的に考えられるような授業を考えていきたいと思っています。

<コメント6>

機材トラブル（PCが固まる、後ろのモニターを映らない）についてもう少し工夫した方が良いと思う。

【回答】よりスムーズに授業ができるように、これから気を配るようにしたいと思います。

以上、簡単にですが回答させていただきました。他にも以下のようなお言葉をいただきました。大変ありがたく思います。

- ・図書館の役割を考えながら、情報処理の基本的な概念が学べる授業は大変興味深く拝聴しました。
- ・はじめにレポートのコメントと復習から入るのは良かったと思います。
- ・紹介する例も、学生が関心を持ちやすいものを選んで話されていた。
- ・パワーポイントは丁寧に作られていて見やすいものだった。
- ・学生にイメージが持ってもらえるか心配だったが、いろいろなツールをうまく使っていると感じた（PCが止まるのは仕方ない）。
- ・文献目録などの実物を使って授業するのは面白い。

最後になりましたが、学生が世の役立つ人材になれるように、今後もより良い授業を目指して改善を繰り返していきたいと思っています。



「心理学Ⅰ」

佐々木 尚之

（公共学部公共学科 准教授）

1 はじめに

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、授業形式を大きく変更する必要性に迫られた。多くの先生方同様に、高等教育のオンライン化のあるべき姿について試行錯誤を重ねている段階である。

いまだ最適解を導き出せているとは言い難いものの、2年にわたる経験の蓄積を経て、オンライン授業の取り組み方について共有する機会を得たことに感謝を申し上げます。

ご多忙の折、公開授業および意見交換会にご参加くださり、皆様から貴重なご意見をいただいた。あらためて御礼申し上げます。

2 本学における心理学の位置づけ

本学では心理学は専攻科目ではなく、副専攻科目の1つである。副専攻科目群は、他者との関係性を築き、「生きがい」をもって人生を楽しむための、前向きな心と力を養うことを目的とした教養科目として位置づけられている。本科目は全学科、全学年を対象としており、ほとんどの学生が初めて心理学にふれる。そうした背景を意識しながら、学生たちの知的好奇心を刺激し楽しく学べるような授業を展開しているつもりである。具体的には、専門用語の暗記などを学生に求めず、基礎的な理論や概念、方法論について、広く浅く理解できるような内容としている。本学の主専攻である経済学、経営学、公共学と親和性が高い学問であると感じており、心理学で学んだ内容が学生たちの専門科目との懸け橋になれるよう心掛けている。



3 オンライン授業での取り組み

2022年度前期の「心理学Ⅰ」は、LMS（学習管理システム）の1つである **manaba** を利用し、オンデマンド方式のオンライン授業を行った。履修人数は400人である。開講時間は本来であれば水曜日の3限目であるが、毎週月曜日に講義資料を公開し、それぞれの授業内容に関する小テストの締め切りを木曜日に設定した。

講義資料は、授業内容の要点をPDF

にまとめたスタディガイド、授業内容について私が口頭で説明しているYouTubeのURL、授業内容に関する補足資料の3点である。対面授業で行っていた授業をオンライン化するにあたり、私が気をつけていることを紹介する。

第一に、講義資料の公開や締切りのサイクルを規則的にした。これは、これまでの反省点をふまえての改善である。昨年度までは **manaba** にアクセスが集中することを防ぐために、提出物の時間指定を避けるように求められていた。そのため、学生の課題提出忘れが散見されていた。今年度からそのような要請はなくなったため、毎週木曜日の18時を提出期限に固定化した。18時とした理由は、自宅にインターネットの環境がない学生でも、大学内の施設を利用すれば提出できるためである。他の要因の影響も考えられるため、必ずしも提出期限固定化の効果のみとは言えないものの、昨年後期の課題提出率の79.7%から、今年度前期は84.5%へと約5%向上した。

第二に、可能な限り双方向に近づける仕組みにした。オンライン授業にはどうしても一方の情報伝達にとどまってしまうイメージがあるが、普段の対面授業以上に双方向のやりとりができていると感じている。毎授業後に小テストを実施しているが、問題の最後に必ず自由記述欄を設けている。大教室で質問やコメントをすることをためらう学生は多いものの、LMSを利用するとそのハー

ドルがかなり下がるため、非常に多くの学生が建設的かつ実践的な質問やコメントをくれるようになった。次回の授業の冒頭でそれぞれの質問やコメントに対する返答をすることにより、個別指導コレクションや掲示板を通して、さらなる質問やコメントをもらえることもあり、学生の学びの深化に寄与していると感じる。



また、オンライン授業であることを積極的に活用し、数多くの補足資料を提示することで、双方向性を確保した。たとえば、「バーナム効果」について説明した授業においては、「The Greatest Showman」の映画のトレーラーを紹介したり、錯視について説明した授業においては、NTT コミュニケーション科学基礎研究所が作成したウェブサイト (<http://www.kecl.ntt.co.jp/IllusionForum/index.html>) を紹介したりするなどして、学生が発展的に楽しく学べる機会を提供した。このような補足資料の内容は直接的に成績にかかわるものではないものの、学生の知的好奇心を刺激することにより、それらに関する質問やコメントを引き出すことが多くあった。

第三に、配布する PDF 資料は、あえて簡潔な内容とした。授業を対面で行っていたころからのポリシーとして、一つひとつの授業をその場で理解してもらうことを重視している。その際に、学生自身が自分なりのノートを作成することを求めている。学期末テストでは、自筆ノートの持ち込みを許可していたので、それぞれの授業でノートを書きとめる必要があると学生自身も理解していた。そうすることにより、大教室であってもかなり静かな環境を保つことができていた。オンライン授業となっても、動画を見ながら自分なりのノートを作成することを促した。多くの学生の場合、まず小テストの内容を確認してから講義資料に目を通す。したがって、講義資料が単なる答え探しとにならないように、小テストの作り方にも工夫が必要であった。たとえば、心理学研究法の授業では、以下のようなオリジナル問題を作成した。

<小テスト例>

「アカリさんは、スーパーマーケットで流れる音楽が購買意欲に与える影響を調べる実験を行った。グループ A に対してはクラシック音楽を流し、グループ B に対しては音楽を流さないで、一人あたりの購入金額を計算した。」

この実験の統制群は？ この実験の実験群は？
この実験の従属変数は？ この実験の独立変数は？

- | | | |
|---------------|--------------|-------------------|
| a) グループ A | b) グループ B | c) グループ A とグループ B |
| d) アカリさん | e) スーパーマーケット | f) 音楽の有無 |
| g) 一人あたりの購入金額 | h) 該当なし | |

PDF ファイルにそれぞれの定義は記しているが、動画でより詳しく日常生活における例などを示しながら説明している。この方法をとることにより、学生自身により深く考えさせる効果があると考えている。動画内で説明している例とは別の例を用いた応用問題を作成しているので、専門用語

を理解していないと回答ができないようになっている。したがって、小テストを回答している学生とほぼ同数の学生が毎回動画を視聴していた。すべての資料の配布を求める学生もいたが、むしろこのスタイルを好意的にとらえる学生の方が多い。

4 おわりに

オンライン授業が始まってから2年が経過し、まだまだ改善する余地はあるものの、対面授業と比べて質的にさほど差がないレベルの授業はできるようになってきたという手応えを感じている。オンデマンド型のオンライン授業の難しさは、学生の理解度の測定にあると考える。講義資料を見れば直ぐに解答できるような仕組みでは、なかなか学生の学習意欲を維持することは困難であろう。そういった意味で、学生の知的好奇心を刺激し、自らの意志で楽しく学べる工夫をすることが重要になる。特に、学習習慣の乏しい学生に対しては、非常に重要なアプローチであると確信している。授業や課題の難易度を下げることなく、楽しく学べる環境を保ち、学生にチャレンジする勇気が教員に必要なのかなと感じている。

最後に、公開授業に際して温かいコメントを頂戴し感謝申し上げる。



「社会・地歴科教育法」

西岡 尚也

(公共学部公共学科 教授)

1 教育課程指導室の活用

今回の公開授業は、9号棟4階教室に新設された「教職課程指導室」で実施された。この教室は従来の固定された机と座席ではなく、現場の中学校や高校の教室と同じ、個別の机・椅子になっていて、教育実習のイメージで「模擬授業」が可能になっている。特に「机の移動」ができ、班学習やアクティブラーニングなどに対応できて便利である。

また学生諸君が自主的に教育実習の練習(板書の使用、時間配分、教員と生徒の駆け引き)などに、空き時間に使用ができ、工夫すれば大いに活用できる教室環境である。これまで本学にはこのタイプの教室が少なかったが、今後は積極的に活用して行きたい。

2 学生相互の模擬授業評価

今回公開したのは、毎回3人(15分間×3人)で実施している「模擬授業」である。毎回3人を事前に決定し、各自の単元が重複しないように注意しながら行っている。

模擬授業実施前日の昼休み(13:00)までに、「指導案(50分間)を提出」し、(A4で4枚=A3用紙1枚でウラ表に印刷)印刷は私が行って、当日に全員に配布している。ただし指導案の詳細内容については、「厳密に規定せず」とりあえず各自で努力工夫し前日に提出できればOKにしている。この背景には指導案の細部にはこだわらず「作成してみることを優先し、重視する指導方針がある。

また1コマ講義=90分間で15分×3人で、人数が少ないと思われるかもしれないが、余裕を持って「振り返り時間=コメント」の時間を設けているからである。

模擬授業では第一に「人前で話す」という状況に「習うより慣れる」ことを優先している。同時

に「他人の授業」を観察して、記録カードに「コメント」「評価」を記録してもらっている。

私からのコメントは、「細かい失敗やミスを気にしない指導」を心がけ、「記録カード」は毎回提出させ、次の講義で「模擬授業実施者」に返却している。

また「カード」は匿名記入にせず、記入者氏名を書いてもらい、自己の責任で「評価」を実施するという意識を促すように工夫している。



記入項目は①良かった点、②工夫が見られた点、③改善すべき点、④全体の感想、および 100 点満点中の総合評価である。

意外にもこの方法は受講生に大変好評である。わずかに「15 分間」であるが、他人からどう見られ、どんなコメントが書かれているのか、という点で学生「相互の評価」には大変大きなメリットがあり、「学習効果」があると考えている。実際の教育実習でも「実習生相互の評価」の時間が設けられるため、その事前練習にもなっている。

3 教育学部でない私学における「教科教育法」のあり方

この教科は教員免許取得のための講義である。免許取得関連科目は通常大きく 2 つに分類されている。「理論科目（講義中心・座学）」と「実習科目（実技科目）」がそれである。私のこれまでの経験（前任校、教育学部）では、「社会科教育法」は、「理論科目」でありその講義の中心は、小・中・高校・特別支援学校「学習指導要領」の社会科関連小教科における、発達段階における「目標設定や重点項目の解説」などが講義されていた。しかしながらこれは「教員養成学部」における「教科教育法」科目の位置づけである。教育学部の豊富な関連カリキュラムの中での「教科教育法」はこれでよかった。

そして本学のような教育学部でない私学における「教職課程科目」は、これだけでは不十分である。学生諸君は 4 年生 6 月（または 9 月）に、中学校・高校へ「教育実習」に行くことになる。このための準備（模擬授業経験）が担保できない。教育学部では「教育法」以外の他教科で、手厚い指導科目（模擬授業）が存在している。

したがってこれを補うためには、「教育法」科目でも、スキル＝技術を身につける「実習科目」として考えての講義をしている。そのために前期 15 回の講義で、5 回を通常講義、10 回を「模擬授業」に割り当てて、最低でも受講生が 1～2 回は「模擬授業」が体験できるように取り組んでいる。

4 今後の課題（教員 2 人が担当する通年科目）

この講義は通年 30 回の講義として、2 人の教員が担当している。私は前期 15 回を担当し前期は主に地理的分野、後期は歴史的分（非常勤講師が担当）という「領域」を設定している。成績は通年で評価し、前期（100 点）と後期（100 点）を平均して算出している。

ただし厳密に言えばこれには課題がある。それは「公民分野」の扱いである。模擬授業では前期



に地理・後期に歴史が中心になるので、どうしても公民的分野が指導されていない。

「社会科」教育法という以上、公民的分野の模擬授業も本来なら実施されなければならないが、現状ではできていない。4年生の6月や10月、受講生が臨むことになる、実際の中学校・高校における教育実習では、地理歴史だけではなく公民分野、具体的には中学校の「公民」や高校の「公共」なども担当させられている。

したがって可能なら、この科目でも、公民的分野にも触れる機会を増やしていきたい。さらにそのためには公民科教育法、商業科教育法との「横の関係・連携」を密にすることが課題である。

5 採用試験の合格者を増やして、進路を支援するために

教員免許取得の最終的な出口は、「教員採用試験合格」である。公立学校を対象とした各都道府県・自治体の採用試験情報はもちろんのこと、近年は私学教員の採用試験も盛んに行われるようになった。このような日々変化する採用試験対策には「多くの情報」の入手が不可欠である。例えば『教職課程』（共同出版）、『教員養成セミナー』（時事通信社）などの月刊雑誌の購入、通信講座やYouTube やネット講座、大手予備校の講習会、模擬テスト。さらに自治体での「説明会」「講習会」など、情報が氾濫している。

このような状況で、週一回であるが、昼休みの教員採用試験の「勉強会」を実施してきた。毎年5～6人であったが、熱心に参加してくれる学生がある。しかしながらこの2年間は、コロナで実施できていないのが残念である。この学習会もなんとか復活させていきたいと考えている。その際には新設された教職課程指導室を積極的に活用して行きたい。

最後になりましたが、今回の公開授業に参加していただき、貴重なご意見やアドバイスをいただいた先生方に感謝いたします。

「健康心理学」

上床 幸太

(経済学部経済学科 助教)

1 科目の概要

本科目は副専攻科目（健康・スポーツ科目）の1つとして配置されている。経営学科と商学科の学生を対象としており、受講者数は249名である。授業形態は大講義室における対面授業である。

健康心理学は心身の健康を維持・増進するための心理学である。健康につながる行動や生活習慣に関する情報について、学生は大学入学までにさまざまな場面で触れていると想定される。早寝早起きしましょう、食べ過ぎは控えましょう、ゲームはしすぎないように、ストレス発散が大事…。

こうした情報は、保健体育を始めとする高校までの授業、テレビなどのメディア、自治体による啓発活動などによって、一般的な知識として世間にも浸透していると思われる。

しかし、実際にこれらの行動や生活習慣をすべてその通り実行できている人はどれくらいいるだろうか。私たちはついつい夜更かしをしたり、食べすぎてしまったりする。頭でわかっていてもなかなか実行に移せない。このギャップをどのように理解すればよいのか。どのような工夫をすることでより健康に近づくことができるのか。そもそも、目指すべきとされる「健康」とはどのような状態なのか。こうした疑問に心理学の知見を活用しながら答えることが、本科目の目標である。

2 運営上の工夫

本科目の運営において意識している点は3点ある。

第一に、体験的な学びである。ただ話を聞いて知識として理解するだけではなく、実際に体験することを通して具体的なイメージを持ってもらいやすくすることをねらいとした。そこで、各授業で積極的にワークを取り入れた。また、レポート課題では、自分自身の睡眠状態（何時に寝て何時に起きたか）とその日の簡単な活動内容と気分について、1～2週間記録してもらった。そのうえで、



そこから見えてきた自分の傾向や今後の改善案を、心理学の概念や知識を用いて考察することを課題とした。このように、学生が実際に体験することで、実感を持って学ぶことができるように工夫した。

第二に、双方向の学びである。本科目は大講義室での対面授業であるため、リアルタイムで学生と教員が口頭でやりとりしながら授業を進めることは難しいと考えた。しかし、学生の授業への参加意識を高めるう

えで、双方向性は重要であると思われる。そこで、毎回の授業でミニレポートを課し、そこで出た意見や疑問点をピックアップして、次の授業冒頭でフィードバックするという流れを構造化した。これにより、タイムラグはあるものの、学生と教員のやりとりが毎回行われるという状況を作り出した。また、授業中においても、学生には発言することを積極的に求めないものの、教員から挙手を呼びかけたり問いかけを行ったりするといった工夫を行った。

第三に、視覚的なわかりやすさである。人の心は目に見えない。抽象的な概念を言語的に説明するだけではイメージを持ちづらくなることが懸念される。そこで、こうした心理学の概念やモデルについて、図や表も併せて提示することで、学生の理解の助けとなることを意図した。また、科目全体のカリキュラムや各回の位置づけについても、視覚化した図を毎回提示した。これによって、科目の全体像を学生が意識できるよう工夫した。

3 公開授業に対するコメントと回答

1) 授業資料の工夫

- ・マナバへのコンテンツ資料の内容の提示方法が丁寧で、受講生にとっては、何よりもありがた

いことなのかと思いました。

- ・授業計画を示し、全体の中での今回の授業の位置づけなどを示されていたのは良かったが、それであれば、5パートぐらいに分割されていた今回の授業の内容について、パート間の関係についても説明したほうが良かったのではないか。

- ・PowerPointのスライドの文字が詰め込みすぎておらず、とても見やすいと思いました。

【回答】資料の見やすさや提示方法の丁寧さについては、私自身意識していた点であったため、うれしく思います。一方、今回の授業内容におけるパート間の関係については、授業冒頭で軽く触れるだけにとどまっていた。今後は、毎回提示している授業内容の目次について、各項目間の論理的なつながりをもっと明示的にしたり、要所で説明を繰り返したりするといった工夫を加えたいと思います。

2) 授業内容・体験ワーク・学生コメントへのフィードバック

- ・研究の知見が豊富に提示されていて参考になります。よく準備されているなと思いました。
- ・行間の話が興味深く、学生もよく聞いていると思いました。
- ・学生が体験するワークが授業内容に組み込まれていた点が参考になりました。
- ・途中でワークがあり、気分転換できました。
- ・前回の授業の学生のコメント（感想・質問）が取り上げられていました。
- ・学生の質問を題材として授業をされている点が良かった。
- ・教員と学生のやりとりが生まれるので、学生の授業に対する満足度の向上につながるように思いました。

【回答】ワークやフィードバックは意識して工夫した点でしたので、コメントをいただいてうれしく思います。また、授業内容についてもコメントをいただきありがたく存じます。

3) 学生の参加

- ・下を見ている学生が多いかなと思いました。PowerPointを印刷した資料を見ているためでしょうか？ ノートを取る学生もあまりいないかもしれません。私語はしていないので先生の話は聞いているようですが、もったいないなと思いました。
- ・縦に長い教室で、前のスクリーンと後席用にモニターが教室の中程にあるためか、教室の中程あたりに座る学生が少なく、学生の座る位置が後ろに偏っている点は少し気になりました（中程でも前のスクリーンはよく見えました）。なお、後方の席に座る学生の中には、後ろを振り返りながら私語をしている学生もあり、私語をさせないためにも、座る席は左右の列は窓側のみ、真ん中は両端と真ん中のみなど、制限を加えても良いのではないかと思います。
- ・途中のワークが気分転換にもなり、個人的には楽しかったが、



参加していない学生がいて、もったいないなと感じた。教室を歩くなどして参加を促しても良いのではないかなと思った。

【回答】大講義室での対面授業において、あまり活動的ではない学生をどのように授業に参加してもらうかについては難しさを感じています。ノートテイク、座席指定、巡回など、具体的な改善のための視点や工夫についてご助言いただきありがとうございます。特にノートテイクについては、スライドに穴埋め箇所を設けるなど、ただ聞くだけではない部分を授業の中にうまく取り込んでいきたいと思っています。

4 最後に

この度は公開授業および意見交換会の場を設けていただきありがとうございました。公開授業にお越しいただいた先生方やFD委員会の先生方におかれましては、お忙しい中貴重なお時間をいただきました。客観的な視点からの的確なご助言と励ましをいただけたことで、自身では気づけなかった新たな視点を得て、今後の授業改善に向けて前向きになることができました。この場を借りて感謝申し上げます。



「商法（会社総論）」 脇黒丸 新太郎 (総合経営学部商学科 助教)

1 はじめに

2022年4月より本学に着任し、「商法（会社法総論）」を担当しています。この度は公開授業という貴重な機会をいただき誠にありがとうございました。金曜日の4限目にかかわらず多くの先生方にご参加を賜り、また貴重なコメントや講義の具体的な運営方法について大変有益なご指摘をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。本年度より、初めて講義を行っている身として、まだまだ不十分な点が多々あるかと思いますが、これからの講義をより良くしていくためにも、いただいたコメントをすべて参考にさせていただきたいと思っています。

以下では、まず講義の概要を示したあと、講義を行う際に心掛けている工夫を説明したいと思います。

2 授業の概要について

「商法（会社法総論）」では、文字通り「株式会社法」の内容をテキストに沿う形で1年間を通じて学びます。前期はまず、私法公法の区別や法制度の概要を説明したのち、株式会社をどのように設立するのかを学びます（設立）。その後、会社の機関制度を学ぶうえで、株主総会・取締役会・監査役会などの必要な機関設計を学びます。前期ではこのように、株式会社制度を利用するにあたって会社法上必要とされている機関について一通り学ぶことで、具体的な会社法の体系をイメージすることができ、後期に入ってからファイナンスや組織再編など、会社法の“組織法”としての側面を学習することになります。

公開授業を行った第11回目は、役員報酬制度について学ぶ回でした。学生は第10回目の授業で、役員報酬制度の制度設計がどのようなになっているのか、なぜ株主総会の決議によって役員報酬が定められなければならないのか（いわゆるお手盛りの防止）、なぜ判例等では取締役ら個々の具体的な報酬額を



定めることまでは求められていないのか、といった前提部分を学んでいます。さらに、その前の第8回目と第9回目の授業では、役員として負うべき責任の体系やそのメカニズム（たとえば債務不履行責任、あるいは不法行為責任）を民法上の規定から学習し、役員報酬を受けている役員には会社法上の責任や義務が生じているという前提条件を学んでいます。

そのうえで、第11回目では、役員報酬制度のうち、インセンティブ報酬制

度について学びました。具体的には、新株予約権を利用したストックオプション規制について少し詳しく触れたのちに、報酬開示制度の我が国における現状を説明しました（会社法のみならず金商法の関連部分も若干触れています。また、コーポレート・ガバナンスコードにおける開示規制も簡単に説明しています）。その際には、学生にとって初めて情報開示というワードに接する機会となったことから、そもそもの情報開示制度についての意義や機能なども説明しています。

最後に、第8回目から通じて学んできたように、会社役員が様々な責任や義務を履行していなかった場合、会社機関として株主が持ちうる役割のうち、共益権に該当する“株主代表訴訟”と“違法行為差止請求権”という二つの制度について学び、第11回目の講義を終えました。

3 講義を行う際の工夫

講義はスライドを用いて行い、資料はすべて事前に **manaba** コース上にアップロードしています。その際は、**PowerPoint** の資料ですとデータ容量が大きいため、すべて **PDF** に変換してアップロードするようにしています。講義内では紙媒体の資料は配布せず、学生の手元の端末やスマホによる閲覧を許可しています。

スライドを作る際に一番気をつけているポイントは、いかにして学生に興味を持ってもらうかという部分です。なるべく文字による無味乾燥なスライドは避け、イラストや画などをふんだんに利用しています。従来までの法学部での講義は、スライドを用いたものが少なく、黒板の板書や文字だけのレジュメの配布が主流であったと思いますが、それは学生の目線に立っていないと思ったため、絵やイラストを多用したスライドに変更しました。法学の体系を適切なイラストで表現することが毎回の課題であるため、日々試行錯誤ですが、学生にとってはただでさえ敷居が高い法学という世界に、少しでも入りやすくなっているのではないかと考えています。

また、講義中に学生からの要望が多かったため、スライドの文字のフォント数を大きくしました。これは講義資料として閲覧する際に、文字が小さすぎる、なおかつ1スライド内に文字が多すぎるという意見が多かったためです。このような学生からのフィードバックを常に募集するようにしており（講義内で思ったことはいつでも意見してよいと学生に周知しています）、**manaba** コース上の個別指導コレクションを活用しています。

次に、実際に講義を行うときには、まず簡潔に何をこの講義で伝えたいのかということを冒頭に述べ、学習するポイントを明確にすることを心掛けています。さらに、スライドを参照するだけの一方通行の

講義ではなく、学生からの反応や学生への問いかけを積極的に行うようにしています。一方的な講義であると学生の学習意欲も低下しますし、こちらの伝えたいという熱量もまた低下してしまう気がするからです。意外なことに、私自身の学生時代とは大きく異なり(?)、大商大の学生はこちらからの問いかけにしっかりと返答してくれるので、これが大きな励みになっています。



さらに、法制度を学ぶ上でインターネットの資料をどのように活用していくのが重要な問題となりつつあるため、実際のサイトや一次資料をその場で閲覧してみることをデモンストレーションすることも意識しています。スライド資料には講義内で利用したサイトのリンク付けをしています。学生にとってはただリンクを貼るだけでは不十分であると感じているからです。そこで、講義内では、実際に私がリンク先の資料や法文についてその場で確認するという行っています。

最後に、講義内容は会社法だけの内容にとどめず、経済学や心理学の内容で会社法と関連すると思われる部分も取り入れています。学生にとっては、たとえ私の講義内に理解できなくとも、それをどこか別の場所で再び耳にすることで、「初めて聞く知識」ではなくなります。これが学生の理解により役立つのではないかと思います。そのため、前期では「集団浅慮」、「ゲーム理論 (集団のジレンマ)」、「OODA」、「プロスペクト理論」などの行動経済学や経営学の内容についても、その概要を説明しました。後期でも、適宜このような周辺領域の知識を織り込んでいきたいと思っています。

4 おわりに ―今後の課題について―

このように創意工夫を日々行いつつ講義資料を作成していますが、講義を行う際の今後の課題としては、学生の手を動かすという動作が足りないことを認識しています。先生方からのコメントにもありましたように、学生向けの PowerPoint 資料には重要語句や説明を空欄にしたものを用意するなど、工夫を加えることを今後の改善点としていきたいと考えています。また、スライドの文字数が多い、なおかつ見づらいものとなっている点についても改善が必要です。より簡潔にかつ必要な部分のみを伝えるために、自身の会社法の理解をより深化させる必要があると思っています。

2 授業アンケート

2-1 実施方法

学生の学習に対する考え方や学習意欲を把握し、本学の教育活動の推進に活用することを目的とした授業アンケートが、前期 [2022 年 7 月 19 日 (火) ~ 8 月 1 日 (月)] および後期 [2023 年 1 月 7 日 (土) ~ 23 日 (月)] に出席確認システム「Saai-MAS」を利用して実施された。

今年度も一部の授業がオンライン形式で行われたことから、質問項目はオンライン授業に対応するものが使用されたほか*、2 週間の回答期間が設けられ、その間、学生は自宅からでも回答できる

仕様になっている。

*詳しくは 2020 年度 FD ニュースレター (https://ouc.daishodai.ac.jp/uploads/7749a2025f8dbe435899a93f5b0b601b_1.pdf) を参照されたい。

2-2 対象科目

授業アンケートの対象科目は、原則として、演習科目および体育系の実習科目を除いた各教員の担当科目のうち、履修者数が最も多いものとなっている。履修者数や担当科目の変動によって、必ずしも毎回同じ科目が対象になるわけではない。このため、同一科目の経年比較をしたい、別の科目に関する学生の意識や反応を知りたいなど、教員の要望や判断により対象科目を変更することもできる。

2-3 教員からのフィードバック

授業アンケート結果に対するフィードバックとして、各教員は出席確認システム「Saai-MAS」から集計結果を確認したうえで、感じた点や学生にフィードバックすべき点や授業運営で工夫している点について、「振り返りシート」に自由記述形式で記入し提出することになっている。今年度前期は 2022 年 8 月 31 日（水）に、後期は 2023 年 2 月 28 日（火）に提出期限が設けられた。

2-4 結果の開示方法

授業アンケートの集計結果は、本学図書館で閲覧することができる。また、各教員による「振り返りシート」の記述内容の一部は、本学ホームページの FD 活動ページ (https://ouc.daishodai.ac.jp/profile/educational_research/fd/)、「＜参考資料＞ 学生の学びを支援するための取組み紹介」の＜取組み例＞に掲載されている。



3 FD 研修会

今年度の FD 研修会として、2022 年 10 月 26 日（水）17:00 よりユニバーシティホール蒼天において、協和綜合法律事務所弁護士の岩井泉氏による講演「オンライン授業等を行う場合の著作権法上の留意点」が行われた。

コロナ禍をきっかけに、大学教育においてもオンライン形式の授業形態が広まっただけでなく、対面授業の教材配信などもオンラインで行うことが珍しくなくなった。このような近年の教育環境の変化を背景に、大学教職員が著作権法を遵守しつつも ICT を活用しながら教育の質の向上を図ることができるように、著作権法の実務に詳しい岩井氏を講師に迎えて、授業で公衆送信等を行う際に起こりやすい問題を取り上げ、その留意点について解説していただいた。

今回の FD 研修会では、大阪樟蔭女子大学と締結した教育・研究等に関する連携協定書に基づき、相互の知見の理解と教育・研究に関して連携するため、大阪樟蔭女子大学から 3 名の教員に参加いただいた。当日は、専門領域を超え、教育上の課題の共有および意見交換をすることができ、両大学のさらなる発展に寄与するきっかけとなった。今後も両大学の強みを活かし、教育・研究等において包括的に緊密な協力関係を築き、連携を深めていきたい。

4 大学院 FD 活動

本学における大学院FD活動の一環として、修士論文中間報告会が2022年10月に開催された。以下は、大学院地域政策学研究科長である南方建明教授による報告である。

「2022年度修士論文中間報告会」開催される

南方建明

(大学院地域政策学研究科長・教授)

2022年度大学院地域政策学研究科「修士論文中間報告会」が、10月15日（土）10:00～14:00、本学6号館2階621教室において、感染対策に配慮しつつ対面形式で開催された。今回の報告者は地域経済政策専攻4名、経営革新専攻2名の計6名であり、その氏名、指導教員および論文題目は表1のとおりである。

表1 2022年度修士論文題目一覧

<地域経済政策専攻>

氏 名	指導教員	論文題目
朱 培源	金 早雪	中国・高齢者政策の変遷 ―「家庭扶養」を中心に―
黄 秋石	明石 芳彦	鎮江市観光文化資源開発の現状分析と対策
顧 寧翔	狭間 恵三子	訪日中国人の旅行スタイルの変化と奈良にみる地方都市の可能性 ―若年層の観光行動と嗜好に着目して―
周 潤東	閻 和平	スマートシティ時代における在宅介護の姿と課題について

<経営革新専攻>

氏 名	指導教員	論文題目
李 曉華	梅野 巨利	中国ファミリー企業の事業承継と後継者育成に関する一考察
王 建強	南方 建明	OMO（Online Merges with Offline）を志向する先進的企業の取り組みと特徴 ―中国・米国・日本の比較研究を通して―

大学院教授会が主催する「修士論文中間報告会」は、当該年度に修士論文の提出を希望する院生が、修士論文の構成や内容等を報告し、さまざまな専門領域にわたる大学院担当教員から質問や助言を受けることを通して、各自の論文をより一層充実させることを期待して行われている。博士前期課程・修士課程の1年に在籍する大学院生にとっても、次年度の論文提出に向けた研究計画や修士論文完成に向けての取り組みを点検する機会ともなっている。

各自15分の報告に対して、出席教員からは、地域政策学研究科の修士論文に相応しい主題設定であるか、研究の目的・成果が明確であるか、先行研究を踏まえたオリジナル性の高い研究となっているか、研究・分析方法の選択が妥当であるか、さらに論文構成や文章表現が適切であるか

などの観点から、修士論文の完成に向けてどのような改善や検討が求められるか、報告内容に対する質疑や院生の研究目的に照らした助言が活発になされた。

いずれの報告者も、丁寧に報告用資料を作り込み、熱のこもった中間報告を行った。様々な角度から投げかけられた質問や助言に対しても、真摯に受け答えし、より質の高い修士論文を作成したいという熱意が感じられた。

＜報告会の様子＞



地域経済政策専攻 朱培源さんの報告



経営革新専攻 李曉華さんの報告

この「修士論文中間報告会」は、本学大学院に学ぶ院生の相互研鑽と研究能力の育成に資するものであると同時に、大学院担当教員が指導する院生の研究報告に対する他の教員による質問や助言を通して、院生の論文指導能力をより向上させていく大学院FD活動の一環でもある。今後、博士後期課程の大学院生を対象とする「研究成果報告会」「中間論文報告会」とともに、より充実したものとしていきたい。

《編集後記》

今年度も関係者の皆様のご協力のもと、無事にFDニューズレター第24号を完成させることができました。ご多忙の中、「公開授業を終えて」の記事を書いてくださった先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。

私事ですが、先日、家のトイレの電気系統が壊れて便器を新しくすることになりました。どのメーカーのものにするかから始まり、どのような機能をもったタイプにするか、付属品はどうするかなど、1冊200ページ以上もあるカタログ数冊を前に呻吟する毎日です。選択肢が広がるほど決めるのが困難になる、を実感しています。トイレ関連商品も4月に値上がりするそうです。さて、それまでに決めることができるでしょうか？（陽）

大阪商業大学 FDニューズレター 第24号

発行日：2023年3月20日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町 4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-6156